

# 古代神道の女性像

山上伊豆母

- 1 記紀の女神
- 2 巫性・母性・水性
- 3 変身の神道
- 4 英雄シャーマン

## 1 『記紀』の女神

日本の宗教史といえは、神儒仏の習合の史跡であり、さらに道教・陰陽道や修験に密教思想などが混合している。しかるに、儒教は宗教というよりは生活や政治の倫理学であり、はやく四・五世紀に流入して古代民の社会生活に適應し、共同体のモ

ラルとなり土着した。世界普遍宗教たる仏教は伝来のさいに、在来の固有信仰と対立しトラブルを起したが、いつか共同体の祖靈信仰と習合して古代国家の儀礼やイデオロギーを形成した。やや傍系の宗教である道・陰陽・密教などは、神儒仏のごとき国家宗教的体面は標榜しなかつたけれども、原始宗教の有する呪術的側面を根強く残しており、上層や民間の個人願望に迎合し、加持祈禱の現世利益を支えてきた。

儒教・仏教の歴史はながく、その流布や伝播も広大であるため、民族を超えて信徒も莫大であり、古今東西の学術的研究や宗教上の業績は汗牛充棟もただならぬ。だが儒仏に比して、日本習合宗教の冒頭につねに掲げられる「神道」については、精確な定義・教義・理論体系などが明らかではなく、また宗教

哲学的研究も意外に少ない。中世以降の宗教神道である、伊勢神道・吉田神道などは始めて神学体系を樹立しようとした業績ではあるが、純粹な古代神道の發生原理というよりは、神祇崇拜や祭祀呪術などを儲・仏・道・陰陽道の論理によつて説明することが多い。

ところで、一見あいまいな固有神祇信仰——私は原神道とよぶ——が、古代・中世をへて今日まで衰亡しなかつたのは何故か。まず、律令開始いらいの神社が津々浦々に熾存すること。神社形式以前の三輪山明神をはじめ、ヤマト国家に先立つ出雲国の杵築大社、宗廟といわれる伊勢神宮を中心に、古代豪族の氏神の社が全国に散在し歴史を物語る。神社そのものは記念碑的存在であり、宗教的形態からすれば説教や伝道は行われない。にもかかわらず、原神道が現今まで伝統された最大要因が神社に存するのは、四季折々の年中行事と生涯の通過儀礼の大半が、神社（産土・鎮守）を中心に行われてきたことによると思う。四季の行事はほとんど農耕儀礼であつて農事曆と農業国の歴史に根ざし、仏教化の弊をのぞく冠婚祭の儀式は産土史に刻みこまれる。譬えれば、わが国の民衆は、現今の近代文明を外被に裝おい、内着に中世封建の義理人情、肌着には神話民俗信仰をつけているのかも知れない。肌着を他人に見せぬ如く原神道は

外国人に理解し難いのだろう。日本人無神論説は誤解であり、重層文化の底辺に民族的宗教心を否定することはできない。

教典を有しない原神道つまり民族の深層心理を求めるためには、最古の神話書である「古事記」・「日本書紀」をひもとく外はない。本論ではとくに、「記紀」に書きのこされた女神像から女性観を考えてみたい。日本神話に活躍する女性で有名なものは、まず創成の地母神イザナミ、太陽女神アマテラス、出雲クシナゲヒメ、海神女トヨタマヒメ、大国主妃スセリヒメ、神武妃イスケヨリヒメ、日本タケル妃ヲトクチバナなどが浮んでくる。日本神話の天地創造は男女神の「国生み」から初まり、国生みは両神のミトノマグハヒに起源する。つまり女神イザナミは「性」と「生」を創造し、ついに「火」と「死」の発見者であつた。原始太陽靈の巫女と推定されるアマテラスはいつか女性太陽神に昇格した。ヤマト国家以前のイツモ国始祖王に、スサノヲをみちびいたのは妃クシナゲヒメであつた。山岳狩猟勢力と海洋漁撈文化を結びつけ王統を守つたトヨタマヒメ。湖死の危機を幾度も救い大国主を出雲の後継王にしたスセリヒメ。なにゆえか、始祖ヤマト大王神武はイツモ系三輪山の巫女イスケヨリヒメを正后とした。「記紀」匣卷のヤマトタケルの英雄遠征譚は、愛妃ヲトクチバナヒメの猷身がなければ、花が添え

られなかった。

こころみに挙げた神話神道の女性像に、共通する基本的な特質は存するのであろうか。伝承・経緯・身分などの差から、それぞれ独自性が見られる。また神話の英雄とならぶ理想的なヒロインとして、多少の文飾も加わっているだろう。だが、上掲の女性は何れも王権の危機に出現し、出雲政権の成立、始祖大王后妃、英雄王妃などであるから、「記紀」編者も安易な造作は許されなかったと思う。私は女性像の基本性格に、三つの特性を挙げてみたい。その第一は巫女的性格、第二は母性的性格、第三は水性的性格である。それらは同時に、固有信仰・原神道の特徴を示すものと考えられる。

## 2 巫性・母性・水性

第一の特性であるシャーマン女性は、ある家系に生れて生來に感受性が強く、風姿にかかわらず異性と縁がうすく、人付き合いよりも自然や鳥獸を愛し、歌舞などの芸能に没入して容易に恍惚状態に入り、時には遂に憑依降神して託宣を神語る。カミの依り代となる巫女は人間としての自我を有してはならない。自我が稀薄ゆえに、男女の性別も不明であり、しばしば性

の転換を行う。逆に、性別の稀薄な人物は巫性があるといつてよい。史上女性の英雄、男まさりの女傑は大むね巫性をもつた人物であった。のち、王権始祖神として崇敬されるアマテラスは、もともと原始の太陽男神に仕える巫女であった。それが天石屋戸事件いらい太陽神に昇格したらしい。そのためか、太陽女神といわれながら、アマテラス（ヒメ）と呼ばない。出雲のクシナグヒメの巫性は、まず八岐大蛇の人身御供であった点から察せられる。三輪山神話の定石のごとく、山霊の竜蛇神が神妻として求めるのは、清潔な巫女であったからである。著名な八岐大蛇退治譚において英雄スサノヲと大蛇とは、ヒメを求める威神としては同格であったのである。

トヨタマヒメは海神の女であり、ヤマト王系の山幸彦と結ばれた。海陸の靈的な連繋に成功したのは女傑を超えて、巫女的呪力を有したとみられる。大国主の妃スセリヒメが、二度も瀕死の難に逢い母神の命により出雲王になる未来の夫の、来訪を予知していたのは巫的 능력である（『古代神道の本質』法政大学出版）。スサノヲ大王の試練である毒蛇や毒蜂の死の床から、巫呪を以て救ったのもヒメに外ならない。始祖大神神倭伊ハレヒコは、あまた集う豪族の子女のなかから、何ゆえイスケヨリヒメを王妃に選んだのか。

大和の高佐士野を 七行く媛女ども たれをし覚かむ  
側近の久米部の祖が、大王に歌で奏上すると

かつがつも、いや先立てる 兄をし覚かむ

と大王が唱和したのは、先頭の媛女が三輪山神と巫女の間に生れた神女イスケヨリヒメなることを、前以て知っていた故と「記」は記す。

ヤマトタケルの悲劇の愛妃、その名も香ぐわしいヲトタチバナヒメに巫(女)性は存したであろうか。私には山幸彦(彦火火出見)の妃トヨタマヒメが、愛児をもうけながら海宮へ帰還したことが想起される。神話物語と歴史伝承の差はあるけれども、そのパターンは同じようであり、タチバナヒメも一児ワカタケルを遺している。走水海でのヒメの入水は、英雄への犠牲的忠誠心が強調されてきたが、真相は海神の巫女が帰海した神話と、ヤマトの英雄譚が結びついたものと私は考える。

第二に、典型的女神の母性観についてはどうか。創成のイザナミが万物生成の大地母神であることは疑いない。その威力や恩恵の偉大さは、夫神の天父神イザナギに勝るとも劣らない。母なるものの原像はイザナミ神話に存するといってもよい。しかるに、王権始祖というアマテラスの母神性については、やや変則的にみえる。まず、かの女は婚姻していない。正常な出

産をせず、その子孫はササノヲとの誓約による出生と「記紀」は記す。そのことは前述した巫女的性格によるのであろうが、高天原における弟ササノヲの度かさなる乱暴を寛恕する姉の思遣りに、母性愛を覗かせているのだろうか。ササノヲの妃であり大クニヌシの母であるサシクニワカヒメは、母性愛の典型として記される。八十神の迫害により死に瀕した吾子オホクニヌシを「母の乳汁」の神呪により蘇生させ、出雲国創設を示唆した賢母神であった。かの女は「記」に「御祖神」とのみ記して忌名を書かないが、永遠の母性の理想をのこしている。出雲国に入ったオホクニヌシは、母神の生き写しともいべきスセリヒメの庇護をうけ、蜂蛇の害をまぬがれ、火難を脱し、父神の試練を通過し出雲の宝器を入手する。ヒメは、良妻の模範として描かれている。

始祖大王神倭伊ハレヒコが、三輪山の巫女イスケヨリヒメを正妃とした理由は、出雲系の神統が母系をたどり母性神の色濃いことを知悉していたのだろうか(「母神の国出雲」歴史読本)。はたして、正妃は大王崩御後に内乱を予知し(巫性)、謀叛者を鎮め、次代大王を育て、王統神話書「古事記」の大臣氏祖カムヤキミミ命を産んだ。母后としての大功は、三輪大社撰社でイスケヨリヒメを祀る「牟川神社」が「子守明神」と呼ばれ、

氏子町が「子守町」と名づけられることでわかる。ヤマト王権英雄の筆頭ヤマトタケルの愛妃ヲトタチバナヒメは前述のごとく、トヨタマヒメに比肩し相似する巫女性格を有したが、ワカタケル王をのこした母后であった。王は王位には即かれなかつたが、「ワカタケル」の命名から、父王の後継として若返りと水遠の生命を呪禱していたのだらう。

以上のべた女性の典型たちは、いずれもふしぎに水性に縁がふかい。イザナギ・イザナミの国生みのもとになる、神婚の起源は海中の島で行われ、「国生み」とは海洋における「島生み」の観がある。アマテラスは河海の中の襖蔽によつて出生し、アマテラスの名も「天照大神」以前に「海光」らしきことを以前に書いた（「神話の原像」）。直接に水と関係うすいクシナタヒメも、スサノヲが高天原を追放され

出雲国の肥河上（つひな）に降り、河上に人有り、老夫と老女と二人、女が名櫛名田比売（くしなだひめ）

ある如く、クシナタヒメは「肥河」水辺の巫女とも考えられる。オホクニヌシの御祖（母）神サシクニワカヒメは、いかなる方法でわが子を蘇生させたのか。母乳の呪文を唱えただけりではなく、具体的な対症療法を神話は書きのこしている。全身の大火傷に対して、海の「蛸貝（アカガイ）比売と蛤貝（ハ

マクリ）」を呼び、貝殻の粉を蛤の汁で溶いて塗つたという伝承はいかにも合理的である。とともに、海産物よる療法を用いた女神は、水性の海神であることを物語る。さらに母神の代理として、愛児オホクニヌシに娶らしめたと推測する出雲のスエリヒメには、水性の神呪はあつたのだろうか。周知の如く、出雲の試練はまず「蛇・呉公・蜂」により惱まされる。ヒメはひそかに、害虫蛇を防ぐ呪布「比禮」をミコトに手渡した。しかるに、ヒレとはもと海洋性の品物で渡海の呪術に用いられたらしい。かの新羅王子アメノヒボコが渡来のさい持参し、出石神社に祀られる「八種神宝」のなかに、「浪振るヒレ、浪切るヒレ、風振るヒネ、風切るヒレ」の名がみえるからである。天孫直系の山幸彦ホヲリ（ヒコホホデミ）の正妃は、対照的な海神の女トヨタマヒメであり、海神こそ「水を知れる神なり」といわれる水の総攬者なのであつた。ここで興味ある点は、ホヲリが火中に生れた山の大王であつたのに対し、妃は水性の中心に生れ海の女王でもあつたことである。

そして、ヤマト王権の始祖大王もまた、ふしぎに水呪の女性を王妃に迎えることとなる。イスケヨリヒメ妃は二重の水呪にかかわっている。ヒメの母は「三島溝咋の女」で、オホモノヌシが「溝流」から覓うたことが一つ。二つめに神婚で出生した

ヒメの住居は三輪山麓のサキ（山百合）の茂る佐牟川辺にあって「記」に

葦原の しこけき小屋に 菅皿 いやさや敷きて わがふ  
たりねし

との大王の歌がある。英雄王将ヤマトタケルの妃ヲトタチバナヒメは、遠く物部氏系を引くとされるが、まず名前の「タチバナ」が注目される。もともとイザナギがヨミ（異界）から「ヨミカヘリ」（蘇生）のさい、筑紫日向橘小戸（筑原で禊祓した神話から、タチバナとは水辺ミソギの霊場（立岩端）を示す。

垂仁記の「常世の非時の香果」に対して、海の彼方の貴重な果実にタチバナと名づけられた。しかも、「倭武王」の雄略帝の後妃は「橘姫皇后」の称があり、タチバナとはミソギ儀礼の聖場と后妃に用いられる神聖な呼称と私は考える（「古代祭祀伝承の研究」）。

### 3 変身の神道

巫性を有する女性は変身する。その変身はたんに装いを改変する如き単純なものではなく、現世と異界、天と地のような本質的変身が現われるのが巫女の特色である。日本神話の大地母

神イザナミは、小論で名づけるならば、民族巫女の起源、大巫母神とも称したいと私は思う。大八州列島を国生み、森羅万象・神人鳥獣の生命を与えた「生命の巫神」であるとともに、火の生誕を境界として、ヨミの大神となり、死の巫女に変身する。この変身のもつ意味は、人間生死に関わるだけに大きい。女性本質の有する根本的矛盾にふれるのか、生と死とが究極的に接近する点を語る神話かもしれない。しかし、ヨミの国で女神が離別する夫神に、「国の人草」の死を予言呪咀するさいにも、「愛しき我が汝夫の命」と呼びかけるところは哀憐であり、「記」の文学性の深さを感じる。

アマテラスが王権始祖に祀られるためには幾多の変身を経過した。第一に女神とされたのに、なぜ「ヒメ」が付いていないか。これは前述のように、原始太陽男神に仕えた巫女が次第に昇格し、ある過程で太陽神に就任したため、男神名を襲名したのではないか。その昇格のプロセスを暗示するのが、変身の伝承である。まず、弟スサノヲが中つ国追放で姉に逢いに来ると、男装し武装し武者振いしたという伝はやや異常であって、おそらく巫女が天の聖地の混乱に当り、武装によって男巫に変身し太陽神に昇格する予兆を現わしたものとのおもう。さらに大きな変身は、有名な「天石屋戸」伝承である（「古代神道の本

質)。神話学・民俗学・史学から諸説が多いが、この伝の本筋はやはり、死と再生の儀礼神話であらう。奇妙なバラドクスは、さきのアマテラスの男装譚は巫女の男巫への変身を語り、石屋戸譚は太陽男神の死から太陽女神への再生ともいいえよう。

ヤマト国家の形成は、それ以前に存した出雲国の成立なくして考えられず、出雲政権はまた始祖王スサノヲの竜蛇征服を経て始めて可能となった。その竜蛇の本拠に当るのは、出雲の中心を流れる肥河であつて、河畔の豪族の象徴的巫女クシナダヒメと、英雄スサノヲの出会いなくして竜蛇譚も生れなかつたといえる。春秋の筆法を以てすれば、ヤマト国家成立の重要な遠因の一つに、クシナダヒメの存在があり、象徴として竜尾発見の天叢雲剣があると私は見たい。「母神の国出雲」で書いたように（『歴史読本』平成五、七）、垂仁太子ホムチワケを追うた蛇体ヒナガヒメは亡き母サホヒメの化身と思われる。三輪山の竜蛇神は男神であつたが、河海の竜神が女性の執念の権化である例は、トヨタマヒメが出産にワニ以外に竜と化す「紀」の一書のほかに、説話も多い。肥河の巫女クシナダヒメは、クシ（奇）の語の付く変化の神女ゆえ櫛に変身し、みずから大蛇の生贄となるか、スサノヲの生贄となるかを自在にえらび、蛇神に化身してスサノヲに身をささげたと考えたいのである。スサ

ノヲがヒメを

湯津爪櫛に取りなして御美豆良に刺し

と書かれてあるのは逆であつて、クシナダの名をもつヒメがみずから、奇異なクシに変じ、スサノヲの頭髮に付着した、ということは大蛇退治の手段を教唆したことを意味するのであらう。

出雲国の建設がヤマト国家成立の大前提という見方になてば、その建設の立役者となつて、べきオホクニヌシの最大の協力者こそ妃スセリヒメにほかならない。ヒメは父神に内密に防毒蛇の呪布を手渡すのだが、その巫呪を側面から見ると、ハチ・ヘビ・ムカデなどと、およそ動物に限られている。さらに、大野の火難に一命をとりとめたのもネズミの力であつて、ネズミを使ったのもヒメの呪力と思われる。とすれば、スセリヒメはすべて動物使役の巫女であつたことがわかつてくる。父神とのさいこの別離に、父の頭髮に棲むムカデを取らしめる試練に、赤土と棟実を手渡したヒメも防虫の術を示唆したが、ついで「生大刀、生弓矢、天詔琴」を携えた二人が遁走する描写は、まさに異界から現界への生還（ヨミカヘリ）を語るものであらう。その主導権はつねにスセリヒメにあつたと、「記」はしるす（『出雲史劇の試み』、『古代神道の本質』）。

動物信仰といえ、出雲神話ばかりではなく、ヤマトの直系

王孫ホリが兄王の誅求で困窮しているのを救助した、海神女トヨタマヒメも出産のさい異形に変身する。

妾も今本の身になりて産みなむ

と「記」は記すけれども、それは「記」が女性出産の。見るな。のタブーを象徴的に語つたとする見方や、古代出産時の生死の境界は現世と異界の接点でもあり、死に隣する異界を、「凡て侘国」と呼んだという考え方よりも、むしろ、前掲「垂仁記」ヒナガヒメの例から考えてみたい。出雲大神の恩頼により失語症が治癒したホムチワケ王は、一夜寝た出雲の巫女のヒメの蛇体を見て逃げ、ヒメは追う。これは話が逆で、「一夜妻」を王が見すため、怨恨のためヒメが蛇体になつたと見るべきだろう。トヨタマヒメは出産のタブーをホリが破り、異形の本姿(ワニまた竜)を窺見されたため、海路を閉ちて海神宮へ帰つたと書かれたのも、文脈の前後があるともられる。神話伝承のフィルムを半ば逆転すれば、ヒナガヒメのごとく、ホリにとつてトヨタマヒメは、「一夜妻」であつた。海路を閉ざしたのは、海神女に花をもたせて主體性を与えているが、天孫ホリが海神宮のヒメに姪ませながら、二度と妻訪いしなかつたことを語る。狐園の怨みに堪えかねたヒメは、恥をしのんで現界・中つ国まで天孫を追いかけるが、その姿はワニや竜のごとき

憤怒の異形であつた、とみなすべきであらう。まこと悲しい変身である。

神倭イハレヒコ大王のイスケヨリヒメ妃は、やや個性ある特色を有して、「神語」をもつ巫女といえる。神語とはオホナムチとヌナカハヒメとの唱和にみえる呪歌であり、諷刺子言歌謡をいう(拙著「古代祭祀伝承の研究」)。大クメの手引きで、大王とヒメとの最初の出会いに、ヒメはうたう。

あめつつ、千島ましとと、など裂ける 利目。

これは大クメの「雙利目」と奇しと思つたと「記」は書くが、私は反対に乙女ら遊行列の先頭に立つヒメが、目に隈取りの化粧をしていたと考える。第一人称を三人称的にうたうのは古代歌謡の例が多い。つまり、神武記時代に入れば、大王の正妃となるべき巫女は、他と区別し神聖な神女の化粧という。変身を行ったのではあるまいか。しかも、大王崩後には、タギシミの謀反を予言し、内乱の子兆歌(ワザウタ)を歌つて神巫としての本領を発揮するのが大后イスケヨリヒメである。

狭井川よ 雲立ちわたり 畝火山 木の葉さやぎぬ 風吹

かむとす

畝火山 狂は雲と居 夕されば 風吹かむとぞ 木の葉さやげる



まさに、革命直前の不穏な世相を諷刺した名歌であつて、巫女王イスケヨリヒメは立后いらひ、かなり演出の芸にたけた芸術的な巫女（私は芸巫とよぶ）であつたことがわかる。

始祖大王の正妃の巫女的系譜を正統に継いだのは、大王の大和平定経略を継いだヤマトタケルの愛妃ヲトクチバナヒメといえよう。もとヒメは物部氏系の「穂積忍山宿称」の女であるから、鎮魂呪術を専有する軍事族出身であり、いわば太子將軍側近の従軍巫女であつたのであろう。古代中国の戦団の先頭に互いに巫女を立て、開戦の勝敗を決する風があつたことを白川静氏は説かれている。しかもミコトは英雄將軍であつたとともに「記」に数多の歌謡をのこす詩人でもあつた。ヒメは忠実な従軍后妃であつたとともに、走水海渡海中の暴風に対し「紀」に今風起り浪<sup>はら</sup>溢<sup>あふ</sup>くして、王船没みなむとす。

是れ必ず海神の心ならむ。

と、「海神の心」を察知したのは、ヒメが海洋性の巫女、もとはトヨタマヒメに近い本性を語る。「海に入」るのに、水死を表わす記事はなくて、

菅登八重、皮登八重、純登八重

を「波の上に敷」いたのも、海神の女、としての、正式掃還をもの語つたのであろう。しかも、大王妃イスケヨリヒメの芸

巫たる系譜を引くことには、遠征中の名歌がのこされている。焼津従軍に火難の最中に

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中にたちて 間  
ひし君はも

これを古代歌垣の相聞歌という説もあるが、やはり英雄物語における純愛の絶唱とみるべく、海陸をつなぐ巫女の男まさりの性格もあわれている。七日たつて、その後の「御櫛、海辺に依りたりき」も、真にあわれな状況描写ではあるが、神話的にみれば、「クシ」はクシナタヒメ以来、神巫女のシンボルであつて、クシヒ（奇異）現象を示しヒメは変身して再生すること、クシナタヒメがサノヲの髪に宿つたこと、タチバナヒメは海神の宮に蘇生したことを暗示する。

#### 4 英雄のシヤーマン

いままで述べた「記紀」の巫的女性像の、すべての特性を一身にまとい、古代史の初頭に実質的な「女帝」として、神話的巨像をあらわすのがオキナカタラシ（神功）皇后である。ヤマト国家の統治形態を「祭政一致」なる語で一般に説かれることがあるが、ほんらい祭事と政事とは領域が分れており、祭政一

致なる語は近世の復古神道以後の用語であることに注意したい  
(拙著「古代神道の本質」平成元、法政大学出版)。ゆえに「祭  
政一致」の代りに「巫政国家」と私は名づけた。つまり、「紀」  
編者もひそかに「魏志倭人伝」の女王卑弥呼に比定した神功皇  
后は、いずれも「巫政の女王」と呼んで妥当かとおもわれる。

さて、古代巫女王の典型として挙げたイザナミからヲトクチ  
バナヒメまで、陰に陽に共通する特質として巫性・母性・水性  
が存したが、さらに以上の特性を発揮するために、さまざま  
な「変身」の機能が発揮されたのである。オキナガトラシの巫性  
は、もつとも明確に記載される。「記」には

大后息長帯日売命は、当時禰神りたまへりき。……禰神し  
て言教へ覚したまひ…

と記し、「神功紀」初頭に

皇后、吉日を選びて、京宮に入り、親ら神主と為りたまふ  
とある。「神主」とは女司祭というよりは、「神語を得て教」を  
垂れる。「神巫」の主をさすのであろう。大后が何よりも母性の  
権化であったことは、臨月の胎児をもつ腹に大石をあてて遠征  
に出発し「事竟りて還らむ日に、茲土に産れたまへ」と予祝し  
たことが伝承に表われる。遠征と出産とは、女王にとって双方  
とも全く生死にかかわる。后は不可能と思える二事に命をかけ

たと見えるのは、産前に神子(応神)と神託された吾子が守護  
すると信じたのであろうか。大后と水性との関わりは、説くま  
でもなく数多の神話のこころ。「記」に、渡海のさい「瓠・箸・  
比羅伝」を海に投じ、海原の魚が船を負い、波瀾が「新羅の国  
に押しあがり、玉嶋里の「河辺」で袋の糸で「年魚」を釣る。  
後の常に折齒したのは創成神の水浴の神「表筒雄・中筒雄・底  
筒雄」であった。

オキナガトラシヒメの変身も著名である。遠征の可否を卜な  
うため、髪を解き海に入り「險有らば髪自ら分れて両に離れ」  
と折替すると、險あつて両分し、それを后が結んで鬘にしたの  
は、結果的に「しばらく男貌」に扮して出発することにな  
る。が、これは明らかに、巫女王の特性である変身呪術であり、  
始祖アマテラスの男装伝承を思わせる。巫覡の本性はついに不  
明であるというのは、神と人間の媒介であるシャーマンは、一  
方では男と女との中間的存在にあり、男神に対しては女巫、女  
神に対しては男巫に変ずるともいえる変性性格を有している。  
ふりかえるならば創成女神イザナミは生の神から死の神に変  
じ、男神イザナギもまた女神死後に日・月・風三貴神を産んで  
いるから母神化したといえる。既述のように、女性太陽神と目  
されるアマテラスも、出雲のスサノヲに対するときは男装して

雄叫びしたのは、原始男神に交替して太陽神に昇格する変身であつた。また逆に、英雄ヤマトタケルが熊襲遠征のさい、「其の結はせる御髪を童女の髪をこめの如ごと梳かり垂たれ」

其の姨あひなの御衣みぎ、御裳みもを服はひて、既に童女まごめの姿に成りて……

(註三)

とある謀計は、「身体長大・容姿端正・力能く鼎を打ぐ」(「紀」)のタケル女装としては滑稽であり、やはりミコトの巫性を物語るものであろう。かれは単に武勇の英雄ではなく、生誕は兄オホウスと双生子で「碓」の呪儀に生れた(「紀」)。西征東討も、じつは伊勢神宮の斎宮「姨・倭姫命」の神語と呪器の伝達によつて、かろうじて成功したのである。英雄と童女との変身も、巫覡としての本性を見るならば了解でき、巫女ヲトタチバナヒメとの相愛もまた納得しうる。さらに、かれが没後に白鳥に変身して飛翔する伝承は、白鳥がわが説話で天女を語ることから、ミコトの巫性英雄観を疑いないものにするであらう(「神話の原像」)。

(平成六、九、三〇)